経　歴

平成12年　4月　郵政省採用
　　同　簡易保険局資金運用課
平成13年　1月　総務省郵政企画管理局保険経営計画課運用計画室
平成14年　8月　同　行政管理局個人情報保護室
平成16年　4月　同　情報通信政策局地域通信振興課企画係長
平成18年　4月　岡山市企画局審議監（情報政策担当）
平成20年　4月　総務省自治税務局都道府県税課課長補佐
平成22年　4月　同　情報通信政策研究所調査研究部主任研究官
平成22年10月　同　情報流通行政局郵政行政部郵便課国際企画室課長補佐
平成24年　7月　同　情報流通行政局地域通信振興課課長補佐
平成24年10月　同　大臣官房秘書課秘書専門官（藤末総務副大臣付）
平成24年12月　現職

を支える仕事

総合通信基盤局電波部移動通信課課長補佐

髙田 裕介

Yusuke　Takada

あのころ考えていた未来は･･･

未来の訪れというのは思ったより緩慢なもので、未だに自動車にタイヤはあるし、がんの特効薬も開発されていない。しかし、私が携わってきた情報通信分野、特に携帯電話はその数少ない例外であろう。昔は友人と酒を飲むにしても、集合時間、集合場所、店（評判を含む）及びそこへの経路を誰かが確定していたものだが、昨今は時間さえ合えば「じゃあ、あとは携帯で」となる。この僅か10年で、待ち合わせの風景はすっかり変わってしまった。

携帯電話と「電波の割当て」

私は携帯電話向けの「電波の割当て」を担当している、･･･といって内容をイメージできる人は少ないと思うので、若干の説明を付す。

携帯電話の大きな特徴は、端末と最寄りの基地局（ビルの上に建つアンテナ）が電波（無線）でつながっている点にある。ゆえに電波がなければ使い物にならず、逆に利用できる電波の量が多ければ多いほど、「つながりやすく」また「スピードの速い」サービスが実現されるので、どれだけの電波を確保できるかは事業者の大きな関心事項となっている。ここで各社の需要を満たすだけの電波を供給できれば何も問題は生じないのだが、スマホの普及により周波数の需要は急増する一方で、携帯電話事業を行うのに適した電波（周波数帯）は非常に限られており、ここに電波を事業者に配分するためのルールが必要となる。このルールが電波法であり、その執行プロセスを私たちは「電波の割当て」と呼んでいる。

この点、欧米は「より多くのお金を支払った社に電波を配分する」仕組み（＝電波オークション）を採用しているが、我が国は様々な指標を総合的に勘案したうえで、より電波を有効利用できると認められる事業者に対して割当てを行うこととしている（申請者の事業計画を比較して優劣を決することから「比較審査」と呼ばれる）。例えば、私が昨年７月に手掛けた2.5GHz帯（高速データ通信専用サービス向け。「WiMAX」「AXGP」などのサービス名で提供されている）の割当てでは、エリアカバー率、災害対策や駅舎やショッピングセンターなどの屋内エリア対策の充実度などを評価の対象とした。市場原理にゆだねると後回しにされがちなエリアの整備や防災への設備投資を促すことが目的である。

細心に、そして粘り強く

ここまで説明すると、大半の方は「すごいですね」「やりがいがあるでしょう」と気の抜けた相づちとも素朴な感嘆ともつかない反応を示し、話題は打ち止めになる。彼らの目に私の仕事がどう映ったのかはよく分からないが、当事者としては「ジェンガ（積み木崩し）のようだった」というのが偽らざる実感である。

実際、この2.5GHz帯の割当ては、１枠を巡る２者の激しい争いになった。割当てを受けられるかどうかは、その企業の向こう十数年の事業運営に数千億円を超えるインパクトを与える。多くの従業員、ユーザーが自分の仕事により影響を受けると思うと、判断ミスは絶対許されない。膨大な申請書類（例えば、割当てを受けた社の申請書類は7000頁超！）を１か月という限られた審査期間の中で何十回と読み返し、政務を含めた省幹部と濃密な議論を何回も行い、意思決定はなされた。

2013年冬、都内某所

意思決定の詳細については、紙幅の都合上触れない（関心のある方は当省のホームページをご覧いただきたい）が、最後にその半年後の個人的な体験について紹介したい。

その日、私は都内の某家電量販店に立ち寄った。色鮮やかにデコレーションされた一角に目を向けると、「あるサービス」の売り出しが大々的に行われている。私が興味を覚えたように見えたのか、販売員に声をかけられた。

「この間電波をもらって、新たに始めることになったサービスです。説明しましょうか。」
「よく存じ上げています。結構です。」

あの売り子さんには、私のひそやかな自惚れをお許し願いたいと思っている。

職場のソフトボール大会にて職場外でのつながりの強さを発揮する瞬間。

経　歴

平成22年　4月　総務省採用
　　同　情報流通行政局情報通信作品振興課
平成22年　7月　同　情報流通行政局情報流通振興課情報流通高度化推進室
平成23年　7月　同　行政評価局客観性担保評価プロジェクトチーム
平成24年　8月　同　大臣官房秘書課
平成25年　7月　現職

まだ見ぬ世界のために

総合通信基盤局電気通信事業部消費者行政課係長

杉本 香純

Kasumi　Sugimoto

最先端のルールづくり
―安心で便利なネット社会のために―

みなさんがいつも当たり前に使っているスマホ。インターネットやアプリを使うことができ、とても便利です。地図アプリでＧＰＳを使えば、簡単に目的地にたどり着くことができます。でも、もしあなたが知らないうちに、他の人があなたの居場所を把握していたとしたらどうでしょうか？あなたが何のＨＰを閲覧したか、他の人が知っていたらどうでしょうか？何となく気持ち悪い、そう思う人も多いのではないでしょうか。

こうした通信技術はとても便利なものですが、同時に、その人が何をしているか、どこにいるのか、というプライバシー性の高い情報も扱われています。私たちが安心してインターネットを利用するためには、通信の秘密や、個人情報への配慮は欠かすことができません。一方で、たとえば携帯電話の位置情報を使うことで人命救助に役立てたり、個人の通信履歴を統計化することで市場分析等ビジネスに活用したりするなど、こうした情報について、さまざまな活用方法が模索されています。社会をより便利にするために、利用者一人一人のプライバシーに配慮しつつ、情報の利用をどのように進めていけばよいのか―私はいま、そんな「便利」で、かつ「安全」なインターネット社会のルールづくりに取り組んでいます。

このように、異なる価値の中で最適なバランスを実現するためには、役所の中で机上で考えていても答えは出てきません。新たなサービスを実現したい民間事業者や団体、一般消費者、有識者、それぞれから意見を聞き、ときには検討会を立ち上げて議論し、最適なバランスを模索し、その結論を新たな制度に反映していきます。利便性の向上と、プライバシーの保護―難しい線引きですが、こういった線引きをして初めて、新たなサービスの実現が可能になります。便利で安全な社会を構築するために、未知の世界のルールを切り拓いていく―そんな最先端のルールづくりに携われることに、日々やりがいを感じています。

ミクロからマクロまで

思えば、入省からこれまで、たった４年間とは思えないほど、「濃い」経験をしてきました。日本の放送番組などのコンテンツを海外に展開するためのコンテンツ政策、ＩＣＴを活用して患者さんの医療情報を地域の医療機関で共有することで、きめ細やかな地域医療を可能にする医療クラウドの推進、特に女性の労働力を活用するための、新しい働き方としてのテレワークの推進、各省庁の政策の透明性の向上や、無駄の削減のための、政策評価の推進、新たな時代をつくる皆さんの進路選択に関わる採用活動、そして現在携わっている消費者行政―どの仕事も、若手ながら、いち担当者として、自分のアイディアを活かしながら仕事をすることができ、言葉では言い表せないぐらい充実した4年間でした。この４年間を通じて、入省する前には知らなかったようなさまざまな日本の課題を知ることができ、特に、現場に密着したミクロな政策立案から、マクロな視点からの政府全体の政策の評価に至るまで、さまざまな視座を身に着けることができたことで、自分の視野が大きく広がったと感じています。総務省は幅広い政策を所管しており、さまざまな分野に横串的に携わることができます。これまでのバラエティ豊かな経験も、そんな総務省だったからこそ、経験できたことだったと感じています。

国際会議で講演する筆者

徳は孤ならず

徳は孤ならず、必ず隣あり―信念を持って、自分の正しいと思うことに取り組んでいれば、自然と理解してくれる人が集まってくる、という言葉です。前例のないことに取り組むとき、その影響力の大きさや、反発を思うと、躊躇して、足がすくむこともあります。ですが、自分の常識で判断して、世の中のために最善だと思う選択をすれば、きっと道が開ける、そう信じて、目の前の仕事に取り組んでいます。

また、一生懸命に取り組めば、それを導いてくれる上司、切磋琢磨し合える同期や後輩がいます。仕事によっては自分一人で担当しなければならず、荷が重いと感じたこともありました。でも、そんなときも気にかけてくれた人、話を聞いてくれた人、協力してくれた人たちがいたからこそ、成し遂げることができたと思っています。仕事は自分一人でやるものじゃなく、みんなでやるもの―あたたかくて魅力的な仲間に恵まれ、日々それを痛感しています。

また、総務省には、子育てや家事をしながら、仕事も第一線でバリバリこなす、そんな女性の先輩方も多く、自分自身のロールモデルになりますし、とても励みになります。また、仕事帰りに、女性の同期や先輩・後輩と飲みに行って、プライベートの相談をしたり、たわいもない話で盛り上がったりすることも多く、日々のエネルギーをもらっています。女性としての生き方を楽しみながら、仕事にも全力投球、そんな女性として成長していけることを、とても楽しみに感じています。

素敵な仲間と一緒に、新しく幅広いことにチャレンジしたい方、前向きに世の中の役に立ちたい方、是非一緒に総務省で働いてみませんか？

同期との女子会（筆者左）